

事例 6 : 車椅子用テーブル

対象者の状況 ⊙ 90歳、男性 要介護度5、寝たきり度B2、認知症高齢者の日常生活自立度 b

⊙ 全盲でバルーンを使用、下肢筋力低下により歩行が不安定であった。

身体拘束の状況

歩行が不安定であり、車椅子等からの立ち上がりを防ぐため、家族の希望もあって、常時、車椅子テーブルを使用していた。

対応方法の検討

車椅子テーブルを使用していても、テーブルをはずしてでも立ち上がろうとするため、テーブルを使っていることで動きにくさや苦痛を感じているのではないかと考えた。

対 応

御家族には、施設として身体拘束を廃止していく方針であること、御本人も精神的に苦痛を感じておられるのではないかと説明し、理解をしていただいた。

食堂やホールなど常に職員が目が行き届きやすい場所で過ごしてもらい、動きがあった時は、何か目的や要求があると考え、声をかけて対応することとした。

目が不自由なため、周囲の様子がわからないことで、余計に不安や危険が増している状態であったので、周囲の様子を本人に伝え、「痛くないですか」、「歩けますか」などと、頻りに声をかけるようにした。また、つまずいたり、引っかかったりしやすいものには十分注意を払った。

これまでの生活の様子から、好きな音楽を聞くと落ち着かれることがわかっていたので、精神的な安定を図るためにも好きな歌などを聞いてもらった。

経 過

介護を行う職員も、車椅子テーブルを外したということで、それまで以上に注意を払い、緊張感を持って見守りなどを行うようになり、本人もずいぶん落ち着かれるようになった。

【着眼点（ポイント）】

家族に、拘束の廃止を説明し、理解をしていただいた点

なにか目的や要求があって、動きがあると考え、対応している点

